



ある時、三年ほど往診している百四歳のおばあさんが入院することになりました。病名は風邪ですが、心不全があるので、風邪をひいただけで息切れがひどくなり、酸素が必要なのです。面倒を見ている八十歳の娘も風邪で寝込んでいるので、入院するしかないということになりました。

入院初日は要注意

山形県の北西部、鳥海山のふもとにある小さな病院。ここが私の勤務先です。自宅で寝たきりの患者さんが百十人ほどおり、定期的に往診していますが、時々、体調を崩して入院することがあります。

患者と向き合い学ぶ日々

と い か ず ひ ろ
土 井 和 博 4期生1981年卒



八幡町と酒田市の合併で、町立から市立へと変わった八幡病院

酒田市八幡病院

【私の勤務地】内科、外科、リハビリテーション科、人間ドックの科目があり、予防からアフターケアまで、生活にも踏み込んだ幅広い医療を行っている。ベッド数46床。行政、福祉と協力し、地域全体の健康を達成することを病院の使命としている。

高齢者が入院するときは通常、「抑制同意書」をもらいます。聞こえは良いのですが、ベットの畳と違い病院の床は硬く、ベッドから落ちると骨折するところがあるため危険なのです。それに、高齢者は夕方になる

と「家に帰る」と言い出す人が多いのです。自宅でも「家に帰る」と言ったら落ち着かなくなるのですが、入院などで環境が変わると「せん妄」という興奮状態になってしまふのです。特に入院初日は要注意ということになります。

「誰のための医療」

さて、百四歳のおばあさんはどうなっているかと、外来後に病棟に行ってみました。すると抑制帯という幅広いベルトを胴体に巻かれ、ベッドに縛られています。熱があつて息が上がっている上に、胴体を締め付けられているのでさらに苦しんでいます。

勤弁してください」。酸素カニューレを鼻に当てていますが、役に立っていない様子で、血圧が上がりが心不全に拍車が掛かっています。

このままではとても入院は無理だと思いました。家族は注射で眠らせてくれと言うが、それをするとも永久に起きられない。家族が付き添えば安心するが逃げ腰だし…。

結局、私たちはおばあさんの胴体のベルトをはずし、ぼつここの管を抜き、ベッドを低いものに交換し、ポータブルトイレを自宅と同じ配列で置きましました。酸素チューブを長くして移動しやすくしました。すると自分で排せつをし、食事も取り、一人で夜を過ごしても転落せず、数日で退院となったのです。

それまでしていたのは「誰のための医療」だったのでしょうか。私たちにも良い薬となりました。こちらに赴任して二十五年になりますが、日々、患者さんと向き合い、学んでいます。

(次回予定は青森県)